

# 1. 徳島・板東俘虜収容所における日本人向け演奏会

井戸 慶治

## はじめに

第一次世界大戦時の徳島俘虜収容所（1914年12月～1917年4月）と、管理部スタッフがほぼ同じで松山、丸亀などの捕虜も統合された板東俘虜収容所（1917年4月～1920年4月）においては、捕虜の立場に配慮した松江所長のもと、捕虜たちの文化活動、とりわけ音楽活動がさかんにおこなわれたことはよく知られている。その中で、ドイツ兵捕虜の楽団による幾度かの日本人向け演奏会もおこなわれた。本稿では、これらの演奏会を知りうるかぎり列挙し、その内容を整理、検討してみたい。

## 1. 徳島俘虜収容所 教会と収容所で

徳島収容所の捕虜たちが謄写版で刊行していた所内新聞『トクシマ・アンツァイガー』の記事によれば、捕虜たちが収容されてほぼ一年後の1915年11月7日、徳島天主公教会（現在の聖パウロ・三木カトリック徳島教会）改修後の献堂式に、この教会のアルバレス神父（収容所でミサをおこなっていた）により徳島俘虜収容所の楽団が演奏を依頼され、演奏している<sup>1</sup>。他の箇所での演奏については触れた<sup>2</sup>ので詳細は省くが、ヘルマン・ハンゼン指揮の「徳島オーケストラ」と合唱団がベートーヴェンの『自然における神の栄光』を演奏し、「数多くの日本人会衆に強い印象を与え、それ以外の住民たちにも大きな関心を引き起こした」。これについては当時の地方新聞においても報じられている<sup>3</sup>。またこの教会改修にさいして、聖堂内部の壁画（戦災のため現存しない）がドイツ兵捕虜の中にいた二人の職人によって描かれていたことが最近の研究で明らかにされた<sup>4</sup>。上記の『トクシマ・アンツァイガー』の記事によれば、これは収容所楽団の初めての「客演旅行」とされている。教会は収容所からさほど離れていたわけではないので、ユーモアを添えるための大げさな表現だが、これが所外での最初の演奏であったことがわかる。それは、教会の信者たちを中心とした限られた人々であるにせよ、日本人聴衆のためのものでもあった。

さらに日本人聴衆向けの演奏が、収容所内でもおこなわれたと思われる節がある。ドイツ兵捕虜がいた当時の徳島で子供時代を過ごした英文学者の中野好夫は、回想録の中で次

<sup>1</sup> *Tokushima Anzeiger. Gefangenenlager Tokushima, Japan 1915–1917*. 邦訳：『トクシマ・アンツァイガー—徳島俘虜収容所新聞—』（CD-ROM版）ドイツ館史料研究会訳・編集、2012年、II巻8号（1915年11月14日）7ページ。

<sup>2</sup> 井戸慶治「徳島俘虜収容所の新聞『トクシマ・アンツァイガー』の徳島関連記事」平成31年度総合科学部創成研究プロジェクト経費・地域創生総合科学推進経費報告書『異文化に照らし出された四国～外国文献と異文化的視点を持つ関連文献の調査から～』代表：依岡隆児、2020年、14, 15ページ。

<sup>3</sup> 大正4年11月8日の『徳島毎日新聞』

<sup>4</sup> 森清治「聖パウロ・三木カトリック徳島教会とドイツ捕虜—聖堂に描かれた壁画—」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』17号、ドイツ館史料研究会、2021年、13–24ページ。

のように述べている。

またこれは明らかに中学に進んでからだが、なにぶんお隣だから毎日必ず収容所の前は通る。ある日ここで音楽会があった。驚いたことにわれら中学生（おそらく市民もであろう）も入場自由なのだ。番兵はいたが止めなかった。武徳殿側の二階席から聴いたが、オーケストラなるものを知ったのはこれが全くのはじめて。曲目もはっきり憶えている。イヴァノヴィッチの「ドナウの漣」が一つ。「かっぽれ」の編曲もやった。珍しかったのは大小の空き瓶に水を入れ、これらをズラリと横棒に吊るし、いまならわかるが、シロフォン風に演奏して聞かせるのだ。曲目から察しても、明らかに最初から市民向け公開を考えての音楽会だったとしか思えぬ<sup>5</sup>。

この「音楽会」の開催期日は不明であるが、引用箇所の前後の記述から 1916 年頃のことと推測される。当時中野が通っていた旧制徳島中学校は徳島俘虜収容所に隣接しており、収容所は本来県会議事堂兼公会堂の建物であった。いずれも現在の徳島県庁の敷地内である。引用中の「武徳殿」というのはこの建物がのちに城山公園に移築されたのちの武道場としての名称であるから、厳密に言えば正確ではない。『かっぽれ』はそのように発声される囃子を交えた大道芸の踊り（の曲）で、幕末から明治にかけて流行し、芸妓や幫間にも演じられ、吹奏楽でも演奏されたようである。引用中の「編曲」とあるのは、捕虜によるものかもしれないが、すでに日本国内で作られていた編曲版を板東で入手していたのかもしれない。この点については識者の助言を俟ちたい。

この演奏会の記録は、陸軍関係の公文書にも捕虜の新聞にも当時の地方新聞にもない。しかし、収容所の中で捕虜たちが音楽を演奏し、そのプログラムの中に本来邦楽の「かっぽれ」が入っており、日本人の聴衆の入場も拒まれることはなかったのだから、「最初から市民向け公開を考えての音楽会」と考えるのも自然なことである。捕虜が自分たちで楽しむための音楽会（通常はそうであった）という建前のもとに、実際には日本人聴衆も意識したプログラムを組み立てており、公に宣伝しているわけではないが一般聴衆についても来る者は拒まずという収容所当局の姿勢だったと推察される。なぜ宣伝や記録を公にしなかったのかという疑問は残る。

## 2. 板東俘虜収容所

### 1) 展覧会のさいに

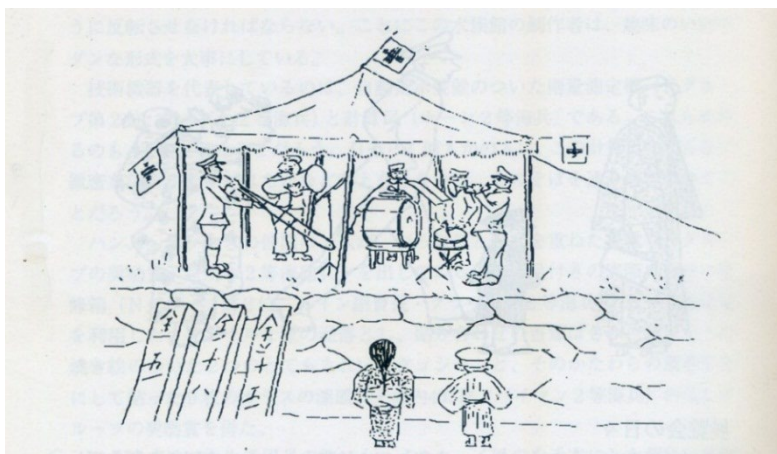
板東俘虜収容所で日本人聴衆も意識した最初の音楽演奏がおこなわれたのは、1918 年 3 月 8 日から 19 日まで举行された「美術工芸展覧会」においてである。この展覧会は、収容所のほど近くにある四国八十八箇所の一の巻所である霊山寺とその向かい側にあった公会堂で開催され、のべ 5 万人が来場した。板東収容所の捕虜新聞『ディ・バラック』I 巻 25

<sup>5</sup> 中野好夫『主人公のいない自伝 ある城下市での回想』筑摩書房、1985 年、109、110 ページ。

号の記事「展覧会の日々」には、収容所の複数の楽団が展覧会にさいして交代しながら演奏したことが、日本人の女性や子供も描いたカリカチュア的な挿絵とともに報告されている。

風や嵐も何のその、収容所諸楽団の大小のグループはいつもの陽気な調べを奏でた。賞賛すべき指揮者たち（シュルツ伍長、ドーバー一等砲兵、エンゲル二等海兵）のもとでの彼らの倦むことを知らぬ活動は、展覧会がこのような大成功を収めたことについて、感謝の少なからぬ部分を受けてしかるべきである<sup>6</sup>。

シュルツ伍長は、エンゲル・オーケストラの成員からなる IIS.B.吹奏楽団の、またドーバー一等砲兵は、徳島オーケストラの成員からなる室内楽団「ウィーン・アンサンブル」の指揮者であった。IIS.B.は、第三海兵大隊(Seebataillon)の略である。



上の引用と同じ箇所にあるカリカチュア的な挿絵。日本人の女性と学童が捕虜楽団の演奏を聴いている。



霊山寺本堂前で演奏するエンゲル・オーケストラ。このオーケストラの成員であったドルトのアルバムより（鳴門市ドイツ館所蔵）

<sup>6</sup> Die Baracke. Zeitung für das Kriegsgefangenenlager Bando. Japan 1917–1919. 邦訳：『ディ・バラック』ドイツ館史料研究会訳・編集、1巻、1998年、342ページ。引用にさいしてはこの翻訳版に依拠したが、必要に応じて原文を参照しつつ修正した。

この展覧会については多くの日本人観客が訪れ、捕虜たちとの接触もふだんよりも多く集中的になされた。そのときの日本人による捕虜たちの作品への評価や捕虜の側からの日本人観は、当時の地方新聞や『ディ・バラック』に比較的多く記録されているのだが、日本人が捕虜たちの奏でる西洋音楽についてどう思ったかということについては、残念ながら記録がない。

## 2) 徳島市における「和洋大音楽会」

明確な証拠の残る日本人向け演奏会として、1918年6月2日に徳島公園内の「千秋閣」でおこなわれた「和洋大音楽会」がある。フライブルクの連邦軍事文書館にこの音楽会の日本語プログラム<sup>7</sup>が残されていて、それによれば全体は三部からなり、第一部と第三部は日本人演奏家による琴や尺八、長唄などの邦楽、中間の第二部では「徳島俘虜奏楽団」(43名)による洋楽の演奏がおこなわれた。この部分の引用を掲げる。

### 第二部 (洋曲)

徳島俘虜奏楽団

陸軍行進曲

十七世紀時代作曲

ロシニ作曲

ウイルヘルム、テル、端西〔瑞西の誤り。スイスのこと〕国民の自由

(内容) 山間の静寂、暴風雨、牧童の歌並小鳥の囀り、端西国民喜悅  
衛兵の行進 (アイレンベルヒ作曲)

行進の状遠方より来り漸次近寄り再び遠く去る

月夜ノ妖怪、恋人の感相〔ママ〕、イエセル作曲のワルツ

アイシヤの曲 (リンゼー作曲)

印度人酋長に就て

人形の女神 (バイヤー作曲)

各種曲目に番号を附し曲目変化度に奏楽場に番号を掲示す

(内容) 左の如し

(1) 前奏人形店の景況 (2) 郵便配達夫来る (3) 新荷到着 (4) 田舎の顧客人形店に  
来り人形を見る、店員人形の泣声をして見せる (5) 人形の泣声 (6) 赤児の言語 (7)  
人形兵士の行進曲 (8) 晩景店を閉じ人形は眠り夜中人形女神来る (9) 時計止り夜中  
の静寂に入る (10) 人形女神又来る (11) 人形女神妖怪に触れ店の人形皆行き上がる  
(12) 人形女神の舞踏 (13) 人形の舞踏 (14) 人形バヤツの舞踏 (15) 一般舞踏 (16)  
再び夜の静寂に入り人形皆眠る

タイケ作曲陸軍行進曲

<sup>7</sup> フライブルク連邦軍事文書館の史料 MSG201-769-16032

桜花ノ夢  
 少女ノ舞踏曲（ワルツ）  
 橈旅行  
 日本軍艦マーチ  
 墮国連隊行進曲  
 白耳義〔ベルギー〕行進曲（ノヴオトニー作曲） 吹奏楽器〔最後の二曲にかかる説明〕  
 独逸海軍マーチ  
 人員 四十三名

二曲目は、ロッシーニの『ヴィルヘルム・テル』序曲であろう。日本の『軍艦マーチ』も奏でられている。これ以外にも行進曲が6曲演奏されているが、行進曲は、もともと軍楽隊の指揮者ハンゼンを中心に作られたこの楽団にとっては演奏の主要な部分をなす曲種であり、収容所においても遠足やスポーツの催し、展覧会、皇帝誕生日、また死亡した捕虜のための葬儀など、さまざまな機会にしばしば演奏されていた。『人形の女神』の作曲家「バイヤー」は、ピアノ教本で有名な Ferdinand Bayer (1803 - 1863)ではなく、多くのバレエ曲やオペレッタを作曲したオーストリアの作曲家 Joseph Bayer (1852 - 1913)である。この曲は“Die Puppenfee“（『人形の精』）というバレエのための曲であり、筆者はあまり知らなかったが、youtube で視聴することができる<sup>8</sup>。

徳島公園内千秋園に於て

大正七年六月二日

和洋大音楽会開催趣旨書

今般の大音楽会開催に就きましては昨年行しし如く本會に對し慶金を締めて其謝意を以て衛生思想啓蒙の目的たる衛生部佐官の費用に充つるのてありませう。昨般衛生部を公稱ししたる船長船員、乗務等の復讐病難府上大に戦へば効果を得ましたのは本會より總督の有る所勸告の上と勸成るん人等とす。

賛成者芳名  
 主 催 徳島衛生協會

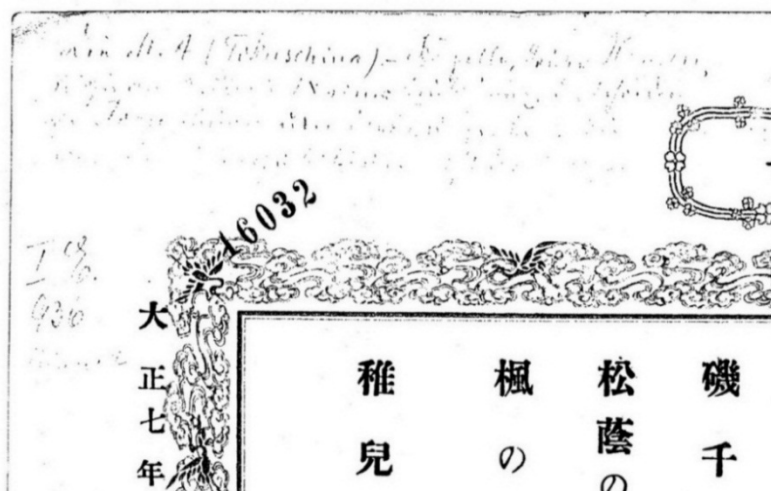
第一節 (序曲)  
 櫻 楓 松 磯 松 四 残 千 銀 櫻  
 兒 の 蔭 千 島 季 千 島 界 海  
 櫻 花 月 鳥 風 思 月 曲 波

第二節 (行進)  
 獨逸海軍行進曲  
 日本軍艦行進曲  
 小橋の行進曲  
 大正七年六月二日

第三節 (其題)  
 末廣舟り  
 浦島太郎  
 五條橋  
 千秋萬歲樂

1918年6月2日の「和洋大音楽会」プログラム。(フライブルク連邦軍事文書館所蔵)「大正七年六月二日」という日付が、欄外の左端にある。

<sup>8</sup> この演奏会については別の箇所でも取り上げたので、詳細についてはこちらを参照のこと。井戸慶治「1918年6月2日、徳島における『徳島俘虜奏楽団』演奏会」『青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究』5号、青島戦ドイツ兵俘虜収容所研究会、2007年、57-60ページ。



プログラムの拡大図。  
 左上の余白に書かれたメモ書き Die M.A. (Tokuschima)-Kappelle の文字がかろうじて判読できる。

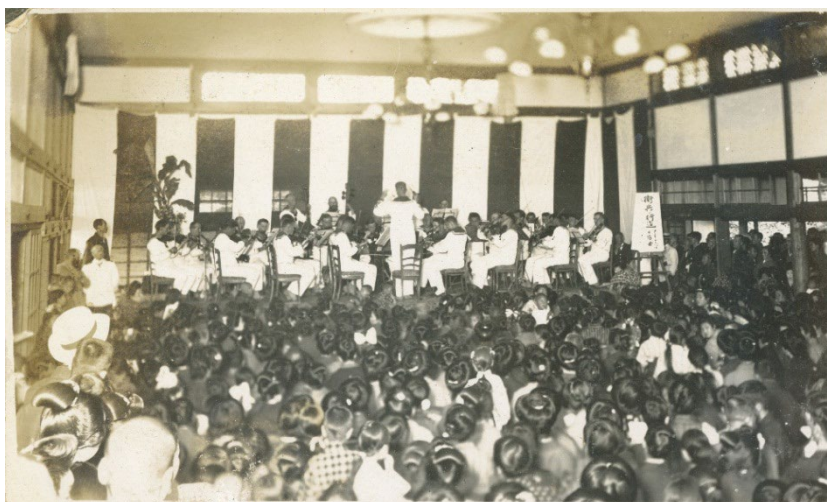


この「和洋大音楽会」で演奏した日本人と思われる人々の写真。ギュンシュマンのアルバムより（鳴門市ドイツ館所蔵）

演奏した楽団「徳島俘虜奏楽団」については、プログラム左上のかすかに判読できるメモ書き Die M. A. (Tokuschima)-Kapelle の表記から、ヘルマン・ハンゼン指揮の徳島オーケストラと推定される。この楽団は 1918 年 9 月より M.A.K.オーケストラと改名し、またそのメンバーからなるブラスバンドは M.A.吹奏楽団と名乗っていた。彼らの所属部隊であった膠州海軍砲兵隊(Matrosenartillerie Kiautschou)からの命名である。1918 年 6 月 2 日といえば、板東俘虜収容所においてベートーヴェンの交響曲第 9 番全曲が日本で初演された 6 月 1 日の翌日に当たる。この演奏をおこなったのも、徳島オーケストラであったから、この楽団は二日連続で場所を換えて異なるプログラムの大掛かりな演奏会をおこなったことになる。板東収容所には、かつて丸亀収容所にいたプロのヴァイオリニスト、エンゲルを中心とするエンゲル・オーケストラもあり、こちらも徳島オーケストラに優るとも劣らないほどの演奏活動を所内でおこなっていた。にもかかわらず前日第九を演奏した徳島オーケストラの方が徳島での「和洋大音楽会」で演奏することになったのは、おそらく彼らが徳島収容所時代から市民向けの演奏をおこなっていた関係によるものであろう。この音楽会に参加した楽団員のひとりが、この日本語プログラムを記念のために祖国まで持ち帰

ったと推測される。

プログラムのはじめにある「和洋大音楽会開催趣旨書」によれば、この演奏会を主催したのは「徳島衛生協会」という団体で、「今般の大音楽会開催に就きましては昨年举行了如く本会に対し醸金を得ましてその剰余を以て衛生思想涵養の目的たる衛生劇供覧の費途に充つるのであります」とある。衛生思想普及のために「衛生劇」なるものが上演されていて、この音楽会はその費用を集めるための慈善コンサートと考えてよいだろう。こうした大義名分があるにもかかわらず、やはりこの演奏会についての公式記録や新聞報道、捕虜新聞などの記録については、いっさい見つかっていない。それだけではない。収容所の入口付近には警察の詰め所があって出入りした人々については洩れなく記録しており、現在それは『雑書編冊』という板東俘虜収容所研究の基本資料のひとつとなっているのだが、そこにもこのときの捕虜楽団 43 名の出入りについては記録がないのである。収容所管理部が警察と示し合わせた上で隠蔽、非公開の措置を意図的におこなったのではないか、という推測が生じてくる。

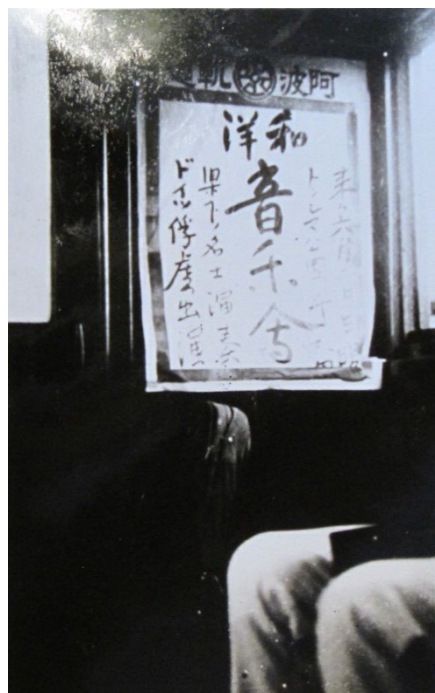


1918年6月2日の和洋音楽祭で演奏する徳島オーケストラ。ギュンシュマンのアルバムより（鳴門市ドイツ館所蔵）

そのため、明らかに日本人聴衆のための演奏を写した上の写真が、講和なった後の捕虜の帰国直前におこなわれた「お別れ演芸会」のものであると、以前は考えられていた。この演芸会の時に演奏したのはエンゲル・オーケストラである。ところがこの写真に写っている楽団員は、全員が水兵服を着た膠州海軍砲兵隊（M.A.K.）のドイツ兵捕虜である。エンゲル・オーケストラに所属していたのは第三海兵大隊所属の捕虜であり、その制服は陸軍と同様のもので水兵服ではなかった。また、楽団の右端に演奏曲目を表示する立て札が見えるが、そこには「衛兵ノ行進」と書かれており、上記プログラムに含まれている曲だが「お別れ演芸会」で演奏された記録はない。さらに、列車の中の広告にこの演奏会の日付が予告されている当時の写真（次頁）も発見された。これらのことが決め手となって、この写真は「お別れ演芸会」ではなく 1918年6月2日の和洋大音楽会のものであるということになった<sup>9</sup>。

<sup>9</sup> これについては、鳴門市ドイツ館館報『ルーエ』32号、2014年12月10日、2,3ページに鳴門市ドイツ

この音楽会の約二ヵ月後、あるひとりの人物のための捕虜の演奏会があった。1918年8月13日、紀州徳川家の16代当主徳川頼貞の一行が板東収容所に来訪し、エンゲル・オーケストラとおそらく徳島オーケストラの演奏を聴いたのである。頼貞は若年期にイギリスに留学して音楽学を研究し、その後日本への西洋音楽導入に尽力した。彼はこの来訪の少し前に、板東収容所で第九交響曲が演奏されたとの情報を入手し、それを聴くためにやってきたのである。このことについては、彼が書いた記録と捕虜の側の記録『エンゲル・オーケストラ その生成と発展』<sup>10</sup>（これ以降『生成と発展』と略記する）の二つの史料から確認できるのであるが、両者にちぐはぐな点もある。頼貞の記録では、ハイドンの「驚愕」交響曲などの後、第九を聴いたことになっている。ところが『生成と発展』の演奏曲目表では、「驚愕」などを演奏したとは書かれているが、肝心の第九については言及がない。そのため、エンゲル・オーケストラが一連の曲を彼の前で演奏した後の休憩後、徳島オーケストラに交代して、そこで第九が演奏されたのであろうと推測されている<sup>11</sup>。オーケストラが異なるとはいえ、『生成と発展』が第九についてまったく触れていないのは不自然な気がするが、この推測は妥当であると思われる。この時の頼貞の感想を引用しておく。



和洋音楽会を予告する列車内の広告  
(個人蔵)

第一に、音楽家でもない之（これ）等の捕虜達、中には二三音楽の専門家がいったように聞いてはいるが、多くの素人達が、音楽芸術に対して斯程（かほど）までの興味と理解とを持っているということに対して、私はこの独逸人たちに敬意を表したくなったのであった。この演奏をしている捕虜達はいろいろな職業を持った者の集りで、決して音楽の専門家ではなく、暇なときに楽器をいじる、謂わば単純な音楽ファンの一味に過ぎないのである。それにも拘（かかわ）らず彼等はベートーヴェンの第九シンフォニーというような大作品を、人に聴かせるためにでなく、自分達のために演奏しようというの

館前館長の川上三郎氏による関連記事「和洋大音楽会の開催日」がある。なお、列車の中の宣伝広告の写真については氏にその写しをご提供いただいた。御礼を申し上げる。

<sup>10</sup> Hermann Jacob: *Das Engel-Orchester. Seine Entstehung und Entwicklung. 1914–1919. Gedruckt und gebunden in der Lagerdruckerei des Kriegsgefangenenlagers Bando, Japan 1919.* 邦訳：『エンゲル楽団、その生成と発展』富田弘訳、私家版、鳴門市ドイツ館所蔵、112 ページ。引用のさいには邦訳版に依拠し、必要に応じて原文を参照しつつ修正した。

<sup>11</sup> 横田庄一郎『第九「初めて」物語』朔北社、2002年、85 ページ。



である。私はこの音楽に対する彼等の真摯な態度に心を打たれざるを得なかった<sup>12</sup>。

捕虜楽団のメンバーの中に「二三音楽の専門家」がいること、しかしその多くが「素人」であり「いろいろな職業を持った者の集り」、「単純な音楽ファンの一昧」にすぎないことについては正鵠を得ており、収容所関係者の説明を受けていたのであろう。捕虜たちの生活は、起床・終身・食事・点呼の時間が決まっているだけで練習のための自由時間は有り余っており、楽団には楽器の初心者も若干いたが、その上達は早かった。これは徳島と板東の収容所に限ったことではなかつただろう。

### 3) 1919年 エンゲル・オーケストラの演奏会

先述した徳島での「和洋大音楽会」は、翌年の1919年3月22日にもおこなわれた。この時の日本語プログラムが鳴門市ドイツ館にある。その表紙の絵の下に記されているように、この音楽会で演奏したのはエンゲル・オーケストラで、それゆえ開催の経緯については、このオーケストラとその成員たちの活動記録である『生成と発展』の中に次のように記されている。

1919年3月22日の「和洋大音楽会」プログラムの表紙  
(鳴門市ドイツ館所蔵)。絵の下のドイツ語は、

Konzert des Engel-Orchesters (Kriegsgefangenen-  
lager Bando) in Tokushima. März 1919

訳：エンゲル・オーケストラ（板東俘虜収容所）の徳島  
におけるコンサート。1919年3月

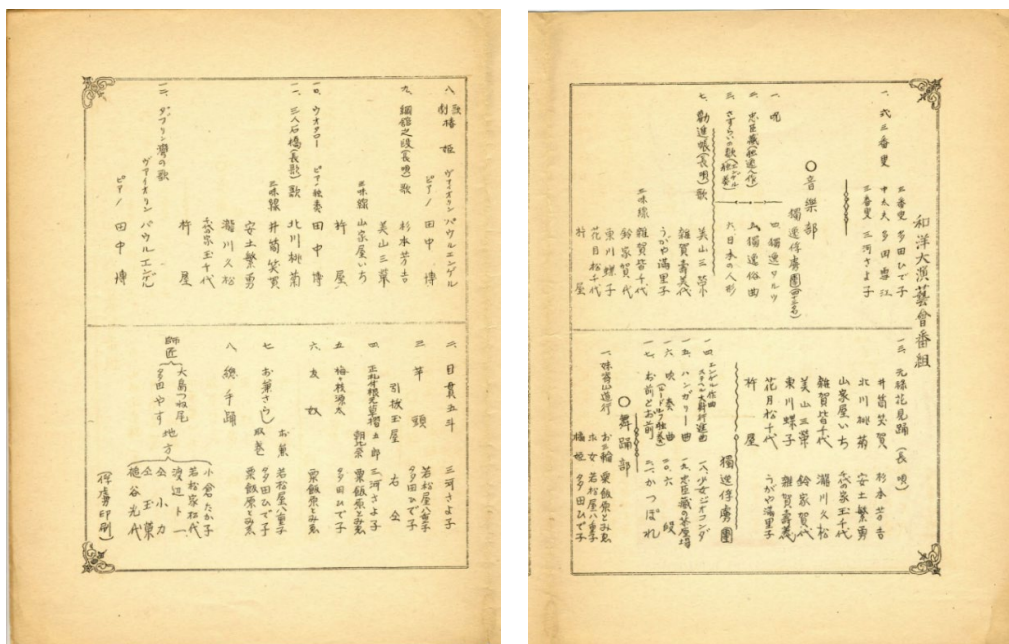


徳島のいろんな音楽団体が、収容所当局の許可を得た後、3月中旬にオーケストラを演奏会に招待したので、楽団員および若干の団員以外の人たちは3月22日に徳島へ出向いた。上陸栈橋のところでオーケストラは委員会の出迎えを受けた。それぞれが造花を一本目印にもらったが、これは演奏会終了後「ドイツ人たち」(die „Deutsu“)の思い出の品とし

<sup>12</sup> 徳川頼貞『菅庭楽話』美山良夫校註、中央公論社、2021年（1941年に私家版として出版された原著の再刊）、128ページ。

てきれいどころの日本女性たちに(von japanischen Schönheiten)強くせがまれた。演奏会は日本式劇場でおこなわれ、二部に分けて実施された<sup>13</sup>。

ここを読むと、徳島の複数の音楽団体が捕虜楽団の再度の出場について収容所当局に伺いを立て、それに対する許可を得て招待したことがわかる。そして収容所は現場の判断で許可を出したのであり、陸軍省など上位機関に申請はしていない。



プログラムの中身。全体の進行は、右上、左上、右下、左下と進む。「独逸俘虜団」の演目は右上と右下に書かれている。(鳴門市ドイツ館所蔵)

この催しもやはり日本人との合同演奏会で「舞踊部」もあり、そのせいかプログラムを開くと「和洋大演芸会番組」〔下線部は筆者による〕と書かれていて、表紙の名称「和洋大音楽会」と違っている。全体の構成は、前回よりも複雑になっている。この日本語プログラムによれば、まず最初に「式三番叟」という民間芸能が三人の女性によって演じられ、次に「音楽部 独逸俘虜団 (四十三名)」第一部の演奏がある。その内訳は以下の通り。

- 1.呪
- 2.忠臣蔵 (独逸人作)
- 3.さすらいの歌 (エンゲル独奏)
- 4.独逸ワルツ
- 5.独逸俗曲
- 6.日本の人形

<sup>13</sup> 『生成と発展』121 ページ。

このプログラムでは、最初の曲「呪」について、もとの外国語の名称が何なのかわからない。これについては、『エンゲル・オーケストラ 生成と発展』を見れば明らかになる。

1. 『ファウストの劫罰』から行進曲 ベルリオーズ
2. 『忠臣蔵』序曲 H. ラムゼーガー
3. ツィゴイネルワイゼン P. d. サラサーテ  
独奏者：エンゲル氏  
ピアノ：クラーゼン氏
4. レジェンデ・ヴァラック、ワルツ M. ブラガ
5. プリンツ・アイテル・フリードリヒ行進曲 H. ブランケンブルク
6. グンカン・マーチ（日本の軍艦行進曲）

最初の曲は、『ファウストの劫罰』の「ハンガリー行進曲」（上記 1 の原文は *Marsch aus „Fausts Verdammung“*<sup>14</sup>）という曲であるが、日本語プログラムでは「劫罰」に当たる *Verdammung* だけを取って「呪」（のろい）と訳しているのである。また、2. 『忠臣蔵』は、板東収容所にいた捕虜ファン・デア・ラーンのおじで神戸在住の商人でアマチュア音楽家 ハンス・ラムゼーガーが竹田出雲の『仮名手本忠臣蔵』をもとに作曲していた全 8 曲の交響詩であり、この音楽会では「序曲」と後に「茶屋の場面」の二曲が演奏されている。彼は板東収容所の捕虜たちに積極的な支援をおこなっていたため、ラムゼーガー夫妻が収容所に来た 1917 年 10 月 21 日のエンゲル・オーケストラ第 5 回コンサートでは、感謝を込めて『忠臣蔵』の前奏曲と序曲が演奏されている<sup>14</sup>。なお、のちの 1987 年に徳島交響樂團によって、また 2011 年には神戸大学交響樂團によって『忠臣蔵』の序曲が再現演奏された。日本語プログラムの 3. さすらいの曲は、「エンゲル独奏」と添え書きがあるが、彼が所内の演奏会で何度も演奏し、徳川頼貞にも聴かせた「ツィゴイネルワイゼン」である。この曲名は「ジプシーの調べ」というほどの意味で、現在は「シンティとロマ」と呼ばれるこの民族には放浪の民という通念があるので「さすらいの曲」と訳されたのだろう。日本語プログラムの 4, 5 の訳も相当に大雑把なもので、翻訳のための十分な時間が取れなかったのかもしれない。

そういえば、このプログラムには表紙に「大正八年三月」とあるだけで、正確な日付や場所は記されていない。前年の「和洋大音楽会」プログラムでも、日付は欄外左端に付け足しのように添えられていた。写真に写っている列車の中の広告も、印刷ではなく手書きである。はじめに期日を決めてそれに向かって計画的に進んでゆくのではなく、さしあたりプログラムを作っておいてそれぞれの演奏家や団体に練習しておき、全体の都合のよい頃合を見計らって間髪を入れず実施したかのようだ。6 番目の曲は、日本語プログラムと『生

<sup>14</sup> 鳴門市ドイツ館所蔵のプログラムによる。『生成と発展』もラムゼーガーに献呈された。ラムゼーガーと『忠臣蔵』については、イレーネ・スーヒ「ハンス・ラムゼーガーの交響詩『忠臣蔵』—日本におけるドイツの非職業的音楽家のアプローチ—」『お茶の水女子大学人間文化研究年報』12号、1988年、を参照。

成と発展』では異なっている。なぜなのかわからない。当日に変更して「軍艦行進曲」にしたのか、あるいはこの曲は同じ演奏会でしばらく後にも演奏されたようなので、記録のさいにそれと混同したのか。

続く 7 から 13 までの演目では、邦楽の長唄の合間に「歌劇椿姫」（その中の有名な曲か。「生成と発展」には記載なし）、「ダブリン湾の歌」という二つの洋楽曲が演奏されている。注目すべきは、これらがエンゲルのヴァイオリンと田中博という日本人ピアニストの合奏であるということだ。

続いて演目 14 から 17 までは再び「独逸俘虜団」の演奏で次のような曲目である。

- 14.エンゲル作曲 ステヘル大尉行進曲
- 15.ハンガリー曲
- 16.吹奏曲（ルードルフ独奏）
- 17.お前とお前
- 18.少女ジオコンダ
- 19.忠臣蔵の茶屋場
- 20.六段
- 21.かっぱれ

これも『生成と発展』の記録と対照してみる。「午後 2 時に演奏会の第二部」が始まったとされており、その曲目は以下の通り。

- 1.シュテッヘル大尉行進曲 P. エンゲル
- 2.ハンガリー喜劇序曲 ケーラー・ベラ
- 3.トランペット曲抜粋 レオイ  
独奏者：ルードルフ氏
- 4.お前同士、ワルツ Joh.シュトラウス
- 5.バレエ音楽『ジョコンダ』より ポンキエルリ
- 6.『忠臣蔵』より茶屋の場 H. ラムゼーガー
- 7.『六段』 日本の歌
- 8.『カッポレ』 同上
- 9.軍艦マーチ

1.「シュテッヘル大尉行進曲」は、捕虜の中にいた将校のひとりで、かつて二年半に及ぶ日本滞在歴があり、エンゲル・オーケストラのヴァイオリン奏者でスポーツなどでも活躍していたシュテッヒャー大尉のためにエンゲルが作曲したものである。演目 3 でトランペットを独奏したのはグスタフ・ルードルフで、エンゲル・オーケストラの中でトランペット、

フルート、ホルンを担当していた。8.「かっぽれ」については、中野による徳島収容所での演奏会の記録でも徳島オーケストラによって演奏されており、楽団が代わってもこれを演奏したのは日本人受けすることが伝わっていたからであろうか。ここではさらに八橋検校作曲「六段」が捕虜楽団によって演奏されている。ドイツ兵捕虜がオーケストラ用に編曲した可能性もないわけではないが、この琴の名曲は明治後期から日本の洋楽楽団にかなりの頻度で演奏されているので<sup>15</sup>、そのための変奏がすでになさされていて、捕虜たちはその楽譜を入手して必要に応じて手を加えて演奏したのではなかろうか。日本語プログラムにはない 9 曲目の「軍艦マーチ」が捕虜側の『生成と発展』の記録にはある（この日二度目になるが）。日本人への受けと曲想の明るさのため、アンコール曲として演奏されたのだろう。

前年の「和洋音大音楽会」では、徳島オーケストラが日本の「軍艦行進曲」を演奏したが、捕虜楽団の演奏は邦楽演奏の部とは別に第二部においてのみであった。しかしこの 1919 年の音楽会では、エンゲル・オーケストラが演奏した中に、新たに「六段」と、ドイツ人が日本の文学作品から作曲した『忠臣蔵』が含まれ、さらには邦楽演奏の中に混じって、ヴァイオリンのエンゲルと日本人ピアニストの合奏が二曲含まれていた。全体として見れば、日独の音楽文化の融合・交流がいつそう進んだ形となっている。

音楽の部分に続いて最後に「舞踊部」の演目が 8 項目あるが、これらは日本人のみによる公演である。日本語プログラムの最後には「(俘虜印刷)」とあり、これが収容所で印刷されたものであり、捕虜たちがこうした部分でも寄与していることがわかる。なおこの催しの会場は日本語プログラムには記されていないが、先述の『生成と発展』からの引用では「日本式劇場」となっており、写真にある建物内部の様子から、1 回目ときの千秋閣ではなく市内の劇場「新富座」と推定されている。ここではのちに捕虜たちだけによる「お別れ演芸会」も催されることになる。



1919年3月22日の「和洋大音楽会」。舞台左端に最初の曲「呪」が示されている。興味深いのはその隣、左端のクラリネット奏者だけは水兵服だということで、M.A.K.オーケストラのメンバーがエキストラで出演していることがわかる。エンゲル・オーケストラでは管楽器奏者が足りなかったため、収容

<sup>15</sup> 細川周平『近代日本の音楽百年 黒船から終戦まで 第1巻 洋楽の衝撃』例えば75ページでは1906年の海軍軍楽隊による演奏が挙げられており、他にも吹奏楽団など洋楽の楽団による「六段」演奏の例は何度も言及されている。

所のもうひとつのオーケストラから助っ人を連れてきたのである。ドールトのアルバムより（鳴門市ドイツ館所蔵）。



この時の日本人演奏家と思われる人々の写真。ドールトのアルバムより（鳴門市ドイツ館所蔵）

それに続く日本人向け演奏会については、『生成と発展』の中に、次のような記録がある。「〔1919年〕5月11日に、『ウィーン・アンサンブル』は、郡長(Landrat)の求めに応じて撫養で演奏した。」<sup>16</sup> 「ウィーン・アンサンブル」(Wiener Besetzung)という楽団は、1918年3月の「美術工芸展覧会」に関する引用の中でも登場した。しかし、同じ名前であっても先の引用の「ウィーン・アンサンブル」は「徳島オーケストラ」の成員からなり、その一年と少し後に撫養で演奏したのは「エンゲル・オーケストラ」の成員により1919年1月に結成された室内楽団である。したがって、この楽団名は、固有名詞というよりも普通名詞のように考えた方がよいのであろう。撫養の演奏会については、この記述以外には記録がなく、演奏曲目などは不明である。

この節において取り上げた1919年の二つの演奏会についても、リアルタイムでの収容所管理部の記録や捕虜新聞、地方新聞の記事は存在しない。3月22日の「和洋大音楽会」については日本語プログラムと『生成の発展』の記録はあるが、後者はこの演奏会から半年ほど後の捕虜解放間近のときに収容所内で謄写版印刷されたものである。

板東のドイツ兵捕虜楽団最後の日本人向け音楽演奏を含む「お別れ演奏会」については、規定の紙面が尽きたため、機会を改めて取り上げたい。またその後で、比較のため他のいくつかのドイツ兵捕虜収容所における日本人向け演奏会の調査をおこない、最後に、徳島・板東の両収容所がこうした演奏会にさいして取った方針について考察する予定である。

<sup>16</sup> 『生成と発展』132 ページ。